

フィールドワーク「都市に残された自然を考える」 —赤塚公園における自然の保全と再生—

2004年11月15日

会では、秋に会員以外の方たちと交流をもつイベントを実施してきました。今年は、10月23日(土)に「都市に残された自然を考える」—赤塚公園における自然の保全と再生—と題してフィールドワークを実施しました。参加者は会員と自然保全活動をされている方達等18名。

また今回は、(財)日本生態系協会の田邊龍太さんに来ていただき、コメントやアドバイスをお願いしました。

赤塚公園は武蔵野台地がおわるところにあり、やや乾燥した崖上と、やや湿った低地(と湧水)があり、平坦な場所は公園広場、利用しにくい急な崖は樹林地になっています。農地や雑木林が次々と開発され、幅の狭い島のような北斜面の樹林地が赤塚公園に残っている自然らしい場所です。水と緑の会は、崖下の湧水ビオトープ、崖上広場の草原ビオトープをつくり、その後の管理を行ってきました。その自然保全・再生実験のあらましを、釣巻さんの説明を聞きながら観察、意見や疑問点を出し合い、自然再生のあり方を話し合いました。

最後に田邊さんから、「ドイツに行ったときに、生き物のために枯れ枝を積んであるのを見たが、ただ積むのではなく、芸術作品のモニュメントのように美しく積んであった。自然を取り戻すときに、そのような景観的に美しくする工夫(美意識)も必要である」、というコメントもありました。昔の自然風景とイメージが重なるような自然再生の心配りが、一般の公園利用者の共感を高めるということです。大変参考になるご意見でした。